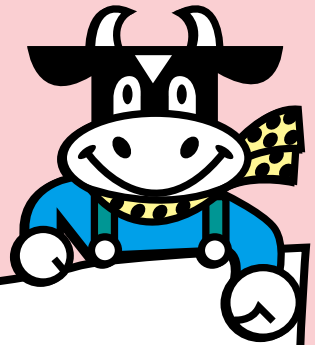




ワンポイント・アドバイス



牛のサルモネラ症

サルモネラ症

サルモネラは、自然界に広く分布する細菌で、牛に感染すると下痢を引き起こすばかりでなく、人の食中毒の原因にもなる公衆衛生上重要な病原菌です。牛のサルモネラ症では、サルモネラ・ティフィムリウム、ダブリン、エンテリティディスによるものが家畜伝染病予防法で届出伝染病に指定されています。

サルモネラ症は、集団飼育される子牛に多発する病気でしたが、近年、牛の飼養形態の変化に伴い搾乳牛での発生が増加傾向にあります。

昨年度の根室管内では20件を越える発生がみられました。サルモネラ症は、発症牛の発熱や食欲不振による乳量低下、抗生剤投与後の牛乳廃棄などにより多大な経済的損失を及ぼします。

症状は？

子牛では、元気・食欲不振、40〜42℃の発熱、悪臭のある粘液や血液の混じった水様〜泥状下痢、脱水症状を示し、下痢が長く続くと、死に至ることも多く、回復しても予後不良となる傾向があります。

成牛では、分娩後のストレスが大きい時期に発症することが最も多く、子牛と同様の下痢に加え、突然の発熱（40℃以上）、元気・食欲不振、乳量低下、起立不能、ときには肺炎や流産などの症状もみられ、重症例では死に至ります。

治療は？

発症牛は、隔離し感受性のある抗生物質の全身投与と生菌剤の経口投与を行います。しかし、全身症状が治まり、見かけ上回復しても保菌牛となり、糞便を介して牛舎環境へ排菌し新たな感染源となることもあります。治療効果の上がない排菌状態の続く牛は淘汰します。

どこから感染するの？

- 発症または保菌母牛から子牛への感染
 - 発症牛、保菌牛の糞便を介して飼槽や飼育器具が汚染され同居牛へ経口感染
 - ネズミやカラスなどの保菌動物との接触
- や保菌動物に汚染された飼料から経口感染

予防法は？

持ち込まない！広げない！

- ・牛の口に糞便が入らないように飼槽やウオーターカップは清潔に保つ。
- ・牛舎の定期的消毒と踏み込み消毒槽の設置。
- ・消毒の前に洗浄し、消毒液は毎日交換する。牛舎内作業をする時は毎回長靴を消毒し、作業後も必ず消毒する。各牛舎間を移動するときは必ず毎回長靴を消毒する。
- ・パドックや通路の乾燥。
- ・菌は乾燥と紫外線に弱い。石灰散布とハッチの日光消毒。
- ・変敗サイレージを与えない。

まとめ

正常な乳酸発酵はPh4・5。サルモネラ菌はPh4・75以下では発育できない。
・サルモネラにかかりやすい新生子牛は成牛から隔離。
・カーフハッチを使用する。冬期舎飼期に親子で密飼いしない。
・媒介動物の駆除。

サルモネラはいったん発生すると、経済的損失が大きく、発生から終息までに数カ月を要します。サルモネラ菌の外部からの侵入を防ぐため、日ごろから定期的な牛舎の清掃、消毒、踏み込み消毒槽の設置など予防対策を実施することが重要です。



（全国家畜畜産物衛生指導協会、全国家畜衛生委員会発行「家畜疾病カラーアトラス」より）